

# 絹本著色「大仏頂曼荼羅図」復元模写による表現技法の研究

岩田 明子（愛知県立芸術大学大学院）

## 1. 目的

本研究は、博士前期課程で行った奈良国立博物館所蔵絹本著色「大仏頂曼荼羅図」（以下、奈良博本）の現状模写研究をもとに、光学調査、先行研究論文、類似作例、文献資料とを合わせて想定復元模写を行うものである。描き手として研究過程や完成作品から図像表現の意図を探ることにより、本作品を描いた作者が目指した仏画の在り様、そして平安時代後期仏画に込められた当時の美的感覚についての一考を示すことを目的としている。

## 2. 作品概要

「大仏頂曼荼羅図」の図像は大日金輪と釈迦金輪の二尊を主としており、個々の仏を単体で描く別尊曼荼羅の形式をとっている。大日金輪をインド神話で理想の王とされる金輪聖王に見立て、周囲には王が持つとされる七宝を配する。そして、大日金輪が座る須弥山の下に広がる大海には、王に従う龍神を描き、左右の岩山には竹林と唐花を描く、風景型の曼荼羅である。風景の中に仏を描くこの構図は珍しく、鎌倉時代の密教図像を記録した文献には本図のような構図が記録されているものの、彩色画としての現存作例はこの奈良博本とボストン美術館所蔵「大仏頂曼荼羅」（以下、ボストン本）の2点のみである。

さらに、奈良博本の表現は、本来伝承されている白描図に忠実に描く密教絵画とは異なる特徴があり、当時の世相・美的感覚によって変更されたものである可能性が示唆されているが、解明されていないことが多い。

## 3. 先行研究

奈良博本についての最も詳しい研究は、仏教絵画史研究家の柳澤孝氏が1973年『美術研究』285号にて発表した論文「日野原家本大仏頂曼荼羅について」である。この柳澤氏の論文は奈良博本の図様とX線透過撮影、蛍光X線分析、赤外線撮影による調査結果とともに、類似作例であるボストン美術館所蔵「大仏頂曼荼羅図」についての指摘が記されたものである。また、2016年発行『国華』にて、奈良国立博物館学芸員の谷口耕生氏により、奈良博本に関する新たな美術史の見解が示されている。その他の文献としては、曼荼羅の専門的な辞典などで紹介されるのみである。

## 4. 研究方法

本研究では、所蔵博物館での蛍光X線分析調査、赤外線撮影など、奈良博本に関する調査資料を参考にして復元を行った。復元案の第一段階として光学調査資料のみをもとにした部分復元試作を行った。次に光学調査のみでは不明瞭な色料について、類似作例の原本調査と同時代で同図像の作例の彩色表現を参考に、第二段階となる部分復元の試作を行った。そして所蔵博物館での調査にて部分復元試作と原本との比較検証を行って復元の最終案を決定し、原寸大の想定復元模写作品を完成させ、視覚検証を行った。

## 5. 美術史的資料の収集と考察

奈良博本の特徴は、金銀の截金を衣の文様と衣紋線に用いていること、大日金輪や釈迦金輪の腕や顔に描き直しが見られること、そして写実的な竹林の表現があることである。これらのことから柳澤孝氏は作者が仏画の描き方に慣れておらず、仏画を専門に描く絵師ではなかったという説を唱えている<sup>1</sup>。

よって、想定復元に向けては、白描図集、同図像作例、表現の類似作例などの儀軌解釈の関連性や表現に着目した先行研究の検討、および画像収集を行った。

## 6. 白描図集からみる類似作例

奈良博本のような彩色作例は他にボストン本のみであるが、いくつかの白描図集には図像の記録が残されている。この節では白描図集それぞれを比較観察し、先行研究を参考にしながら奈良博本の美術史的特徴について考察した。その結果、奈良博本は醍醐寺所蔵密教図像「大仏頂曼荼羅」に類似していることがわかった。奈良博本の特徴的な図像の配置・大きさについて、谷口氏は『国華』にて、「大仏頂曼荼羅」の解釈に関する東密僧の記述をもとに、醍醐寺三宝院流の図像解釈が奈良博本に少なからず影響を与えていると指摘している<sup>2</sup>。

検討の結果、奈良博本が醍醐寺所蔵の密教図像に最も類似していることが分かったが、二龍の頭の数についてはどの白描図集の図像とも一致しなかった。この点を想定復元で参考とする類似作例において考えたとき、頭部の数のみに着目すれば、「摩尼宝珠曼荼羅」の図像との類似性が挙げられた。「摩尼宝珠曼荼羅」には大海に浮かぶ楼閣に収められた三弁宝珠を中心として左に7つの頭を持つ跋難陀龍王、右に9つの頭を持つ難陀龍王が雲に乗っている様子が描かれており、これは奈良博本の画面下半分に類似している。「摩尼宝珠曼荼羅」についての先行研究では、東密の秘法である如意宝珠法との関係性が指摘されるほか、醍醐寺の三宝院流・安祥寺流などで仏舎利と如意宝珠を同一とし、舎利法をこの曼荼羅を礼拝する修法とする一方、勧修寺流ではそれらを別と考えるなど、各派それぞれの解釈が派生したことが述べられている。「摩尼宝珠曼荼羅」が醍

1 柳澤孝「日野原家本大仏頂曼荼羅について」『美術研究』（東京国立文化財研究所美術部編）285号 1973年 19-20頁

2 谷口耕生「奈良国立博物館蔵 大仏頂曼荼羅図」『国華』（国華社）1445号 2016年 48頁

醐寺の秘法として伝えられていたことは奈良博本の醍醐寺流の解釈と通ずるものがあり、奈良博本の二龍の表現には「摩尼宝珠曼荼羅」のような宝珠信仰の解釈も含まれている可能性もあるのではないかと考えられる。

## 7. 類似作例からみる奈良博本の表現について

奈良博本の表現を類似作例と比較するため、唯一の同図様彩色作例であるボストン美術館所蔵「大仏頂曼荼羅図」の原本調査、および奈良博本の特徴的な表現に類似した作例の比較研究を行った。

まず、ボストン美術館所蔵「大仏頂曼荼羅図」について、各図像に赤を使用し画面構成を統一していることは、金銀を各所に用いている奈良博本に共通する点であった。一方、構図についてはボストン本は白描図集に忠実な大きさの比率と配置であり、奈良博本の整然とした図像の配置とは対照的であると思われた。

次に、数多くある同時代作例から参考作例を探すため奈良博本の二尊の顔や翻った天冠帯、銀截金など特徴的な表現に着目し、それに類似した作例やその先行研究について調べた（表1）。その結果、描かれている図像が異なる一方で共通していることは、儀軌にとらわれない柔軟な図像表現がなされているということであった。そしてそれらを時系列に並べたとき、奈良博本は平安後期から鎌倉初期にかけてのある一定の表現に位置していると考えられた。さらに類似作例の先行研究と作例そのものの色彩から、想定復元案を検討するにあたり、色彩は中間色が多用されている院政期仏画の色彩よりも、鎌倉仏画、あるいは南都仏画のような単色に近い色彩表現がふさわしいと考えられた。しかし、截金文様が用いられている点は南都仏画の定義に一致するものではないため、復元案を制作しつつ視覚的な妥当性も考慮する必要があると考えた。

〈表1〉 表現形態の類似作例一覧

作品名	制作年代	奈良博本との類似点		
		天冠帯	顔、体軀	截金
奈良国立博物館蔵「千手観音像」	平安後期	△	○	○
根津美術館蔵「大日金輪・如意輪観音厨子」	鎌倉（大日金輪面のみ）	○	○	×
細見美術館蔵「愛染明王像」	平安中頃	○	×	○
奈良国立博物館蔵「普賢延命像」	鎌倉	○	○	×
奈良国立博物館蔵「普賢菩薩像」	平安	△	△	○
蘆山寺所蔵「普賢十羅刹女像」	平安	△	△	×
東京国立博物館蔵「虚空蔵菩薩像」	平安	△	○	×
醍醐寺蔵「虚空蔵菩薩像」	鎌倉	△	○	×
醍醐寺蔵「閻魔天像」	平安	×	×	○
松尾寺蔵「普賢延命像」	平安	×	○	○

## 8. 光学調査資料の収集と考察

奈良国立博物館にて行った蛍光X線調査では、柳澤氏の先行研究内で発表されていた記録のうち、改めて確認しておきたい箇所に加え、復元案を考察する上で目視のみで色料を判断することが難しい箇所を中心に、大型蛍光X線分析装置で60か所、ポータブル蛍光X線分析装置にて10か所ほどを分析していただいた。

その結果、現状で目視観察できる緑青、群青、鉛白、朱などと合わせて、先行研究でも指摘されていたとおり唐花に銀が確認できた。銀を使用した花の表現については想定復元案を制作する中で検討することとした。また、広い面積を占める虚空部分の色についても蛍光X線分析では特定ができなかったため、制作を通して検討することとした。

## 9. 想定復元模写の制作

美術史的資料と光学調査資料を合わせて想定復元案を検討し、最終的な原寸大模写を完成させた。背景の色調や画面下部の大海の色は濃淡の幅が広がったため、デジタル画像での全体図の想定や手前に描かれている竹林や象宝などの色パターンを使って検討を行った [図1、2]。その結果、背景は無地の絹に未晒しの肌裏を合わせたものにし、風景画としての自然景が引き立つ色彩となるよう想定することとした。また、模写による銀截金技法の考察として、実際に截金を行ってみると銀截金は曲げにくく、金截金のように曲線を作ることに難しさを感じた。奈良博本の截金のうち、銀截金の方が直線的な文様が多く、大日金輪下肢部分にある七宝文様は、形が類似した釈迦金輪の変わり七宝文様と比べて、金属的な折れ曲がりが多く見られる。銀箔を使用した類似作例を見ても、三角形や四角形に切られた切箔を貼り合わせた文様が多く、線状に切った截金を用いているのは衣紋線や光背のような大きな曲線のみである。このようなことから線状の銀截金はあまり用いられていなかったと考えられたため、奈良博本の銀截金による文様表現は技法的にも珍しいものであると言える。



[図1] デジタル画像による想定復元全体図案



[図2] 背景部分復元図案



想定復元模写工程

左：線描、右：彩色途中



完成作品

## 10. 結論

本研究の結論として以下の3つの項目に分けて成果をまとめた。

### (1) 白描図集における大仏頂曼荼羅図との相違

図像は醍醐寺宗派の儀軌解釈に沿ったもので制作者による図像そのものの変更は無い。奈良博本の二龍頭部の数は白描図集にはないものの、醍醐寺近辺で盛んにおこなわれた宝珠信仰を反映させたものではないかと推察する。

諸像の配置や大小関係の変更は制作者の意図的なものであり、大日金輪と釈迦金輪の対照的な解釈に合わせて周囲の諸像は左右対称となるように配置されたものであると考える。しかし、七宝を主尊周りに均等に並べるのではなく象宝と唐花を左右同じ位置に並べていることから、二尊以外の配置に関しては各々の持つ意味的区別は無いものと思われる。よって奈良博本の広い虚空と儀軌と異なる図像の配置は、整然とした構図の美しさに重点を置いたものであると言える。

### (2) 奈良博本に使用されている金属画材と思想

金銀截金の使い分け、諸像における銀泥の使用は構図と同じく視覚的な統一感を狙ったものであると考える。なぜならば唐花や龍神の雲にも銀泥を塗り、重要性の順序に関係なく使用されているためである。銀の使用そのものが、当時の思想の反映である可能性はあるが、奈良博本においては視覚的効果を狙ったものと考えられる。

### (3) 美術史的位置と制作者

類似作例の先行研究や大仏頂曼荼羅図の図像解釈から発願者は醍醐寺にゆかりのある人物だと想定されるが、絵の制作者は儀軌的解釈よりも視覚的な美しさを優先している。類似作例との関連性から想像すれば、奈良博本の図像表現は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけてのある一定の表現形態の流れを汲んでいると考えられる。これらの表現が多様な尊像において共通していることから、初期作品をもとにその表現をまねて様々な彩色画が派生した可能性や、同工房のような近接的な環境の中で制作されたものなのではないかという想像も難くない。そしてさらに想像を広げ、類似作例の先行研究から女性の追善供養や依頼者の個人的な礼拝対象として制作された可能性も指摘されていることを踏まえて奈良博本を見てみると、各図像を小づくりにまとめて整然とさせた作品の雰囲気は、女性的な美意識によるものであるという可能性も想起させる。

本研究を通して、奈良博本はその個性的な形態と装飾性から、発願者それぞれが理想とする仏の姿を視覚化しようとする、当時の人々の篤い信仰心を窺い知ることができる作品であると言える。